

# ロシアのウクライナへの支援——「不信以上に痛切な孤独があるだろうか？」

August 15, 2014

RT : Paul Goncharoff, (ロシア連邦、倫理およびメンバーシップ委員会議長)



「不信以上に痛切な孤独があるだろうか？」と、19世紀の英国女流小説家ジョージ・エリオットは言った。

多文化主義とは文化の多様性を祝福し、そのすべてが同等に尊敬に値するものとして扱うことだといわれる。そして今日、グローバリゼーションの民間政治学では、それが大ブームとなっている。にもかかわらず、その多様性の祝福はうわべだけで、その下に知的怠惰を隠し、特定の民族、文化、あるいはその現実の環境のあり方に、全く関心を持たずとしない場合がある。

そしてそのような怠惰が支配的であるときには、根拠もなく自分自身の文化を他者に投影することになりがちである。現在そのようなことが、ロシアの西とキエフの東の領域をめぐる起こっていて、EUとアメリカはそれらを、客観的に、そしてすべてに先んじて知る努

力をしていないように見える。ここ数週の間、インターネット、ブロガー、ツイートを通じて、また、さまざまな首都の主流メディアの伝統的な政治的意見に同調することによって、さらに深さと幅を与えられた情報混乱の、信じられない勢いを私は目撃してきた。

今日、ほとんどすべての人々が、多くの市民が死につつあり、ドネツクやルガンスクを取り巻く地域の人道的措置の破局が緊急事態となり、日ごとに悪化しつつあることを知っている。反乱地域をコントロールするための、キエフによる継続的な軍事力行使によって、これら2つの地域の人々の窮状は今や臨界点を超えている。ロシアは、生き残りに欠かせない物資のトラック 270 台分を用意して行動に取り掛かった。彼らは輸送の途中であり、紛争地帯に直接それらを配達することを許されれば、かなり事態は改善し、それがなければ死ぬであろう多くの人々の命が救われるだろうと思われる。

モスクワが正式に通知して、正しい外交的な節度をもって臨んでいるにもかかわらず、こういう努力をするロシアに、かなりの程度の敵意と不信が向けられているのは、きわめて落胆すべきことである。それは、ブリュッセル、ワシントン、キエフ、その他、うわべは自由・平等・博愛を唱える陣営の、他の国からの敵意と不信である。私が聞いているのは、この救援隊は“トロイの木馬”であり、ロシアはこれを利用して、その政治的・軍事的アジェンダを推し進めるだろう、そして救援物資には何らかの、名の知れない、嫌なものが隠されているだろう、ということで、要するに被害者たちの援助を公然と引き延ばす気であろう、ということだ。

しかし私は、このような窮状に対する同じような救助の申し出が、EU とかワシントンとか、いわんやキエフから出ているとは、一言も聞いたことがない。つまり救援物資を集めて積み込み、困っている人々に直接これを送るための準備をしているという話を、聞いたことがない。これは私には、苦しんで焼けていく者たちを平然と眺めている暴君ネロの態度に、非常に意識的に似ているように思える。ロシア連邦が公然と、世界が見ている中で、言葉でなく行動をもって、窮境にある人々にとって必要な措置を取っているときに、その人たちにこれほどの不信を抱く EU 加盟国やアメリカの心の中の孤独感は、さぞかし痛切なものであろう。私に言えることはただ、アメリカや EU の取るこの道は、魂を破壊する孤独に至るだけだということである。なぜならそれは、更に大きな不信、間違っただけで解釈された行動、間違っただけで忠告の文化——究極的に信ずるといふことのない文化、他者の中に暗闇をしか見ない文化——を作り出すだけだからである。

この輸送団が、今それを必要としている人々に届くことを信じようではないか。